



最期まで孤立しないために

核家族化や単身未婚者の増加により、自宅で1人で亡くなる人が増えています。最期まで孤立しないためには何が必要なのでしょう。日本で初めて遺品整理専門会社を設立した吉田太一さん(52)の講演から紹介します。

(徳間絵里子)

遺品整理専門会社代表

吉田 太一さんの話



吉田さん

遺品整理の仕事は、亡くなった人の残した家財道具の片づけや処分、買い取りなどです。時代とともに物があふれ、遺族が故人の遺品を形見として利用することも少なくなりました。遺品の片づけは重労働で、思いのほか費用や時間がかかるという遺族の悩みに接したことがきっかけでした。

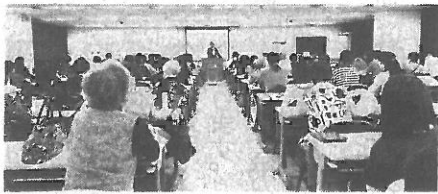
「遺族は思い出があるので簡単に処分ができない。ならば他人がやる方が早いのでは」と考えて、リサイクル業から、遺品

遺品整理の

現場から

最期まで充実した人生を送るために

- …気軽に話せる友達をたくさんつくり、毎日誰かと話そう。
 - …自分から積極的に電話をしたり、食事や旅行に誘ったりしてみよう。
 - …頼み上手になり、「助けて」「お願い」と言える勇氣をもとう。
 - …部屋が汚いと人を呼ばなくなってしまう。常に清潔な部屋を保とう。
 - …自分は何歳まで生きたいかを決め、残された人生の時間を計算してみる。
 - …孤立死は悲しい人生の幕切れ。そうならないための生き方を考えてみよう。
- (吉田さん作成のパンフレット『おひとりさまでもだいじょうぶノート。』から)



「遺品整理の現場から学ぶ」と題した講演会には100人を超える参加がありました＝7日、東京都内

整理専門の会社を新たに始めました。

遺品に生きたまま

遺品整理のため部屋に入ると「遺品が故人の生きたままを語りかけてくる」と吉田さん。どんな服を着てどんな仕事をして、友達はいたのか…とそこで暮らしていた人の顔が浮かぶといいます。

「今日も寂しい」「体が痛い」などのメモ書きが見つかることもありま。遺品は、最後はこんなことを考えていたのかと、遺族も知らなかった故人の思いや人柄を知らせる役割も果たしています。

変死の8割男性

年間1700件の遺品整理件数のうち、誰にも発見されない変死のケースは200〜300件。その8割が男性です。

亡きがらにうじがわき異臭が漂う、悲惨な現場に立つこともあります。

「こんな寂しい最期にならないように、ちゃんと見とけよ」という声が聞こえるような気がするんです。

男性の場合、仕事だけを生きがいにしてきた人が多く、リストラや失業、妻の死といった想定外の出来事に遭遇してパニックになりがちです。

引きこもって近所づきあいで済ませず、ごみ屋敷のような散らかった部屋で暮らすうちに、孤立して健康まで害するという悪循環に陥ってしまうのが典型例だといいます。

近所に複数の友

「人間関係は煩わしいものですが、以前はお互いに助け合うというメリットがありました。でも今は1人でも心地よく暮らせるような、孤立化を促進させる状況がある」と指摘します。

「社会全体で孤立化が進むのは、もう止められないでしょう。でも現実を知り、孤立死はひとごとではないという意識を持つことが大事」という吉田さん。孤立死をなくしたいと啓発DVDも制作しました。

「本当のひとりぼっちにならないためには、身内よりも当てる近所の友達を複数持つこと、質素に遠慮して暮らすより自分なりの楽しみを見つけて暮らすこと、などがヒントになるといいます。

「女性は配偶者を亡くしてもセカンドライフを有意義に過ごせる人が多いのですが、男性は仕事以外の話題がありません。会話のネタを豊富に持ち、人間関係に器用な女性の良い面を見習ってほしいと思います」